

琉球大学理工学部 上 岡 清

1. はしがき

「当初において西九州や朝鮮西南部と同質であった…その爆発的な文化伝播のあと幾許もなく九州と南島との間に高い障壁が生じ別個の文化圏を形成した」¹⁾「折口は沖縄銅釜を通じて日本の古代神道の諸様子をうかがった」²⁾「日本の方言は大まかに琉球方言と本土方言に分かれている」³⁾等々、沖縄の歴史・文化の特質さが各分野で指摘され日本の古い時代の研究上沖縄の研究は注目されている。そこで研究の対象とする石壁についてはどうか。石壁を主要構造物とする沖縄の集域に於て次のように指摘する研究者もある。⁴⁾「沖縄の築城技術は日本から学んだものではない、また中国の域にもちがうからその形式はなじみには古代沖縄人の独創になるものである」

しかしこの推論は十分な調査研究にうづなげられていない。今日依然として課題である。沖縄の研究により、「日本の古代が復興されそれが古代・中世・近世に移り変る過程が明らかになる」⁵⁾というエッセイ、城(グシク)の土木的側面の考察において、同様に土木史的意義があるのか。故小川博三氏はその意義を信じておられた⁶⁾代とくに城(グシク)の唯一の土木的遺跡である石壁について調査を始めたのもこの段向をしながらに外ならない。

前回は研究の意義とともに、その平面・断面・石積工における一般的構造特徴について言及した。今回は同じく各論的に諸課題を検討したい。そこで本稿は、石積工の普及について考察する。

全般的理解のため、前回の補説として、城(グシク)の成立した時代の位置、及び今日みられる種々のグシクの生成・発展モデル(一部草率加工)を、それぞれ図1・2に示した。「グシク時代」は沖縄の歴史区分で1時代を画し、古代社会形成過程として重視されている。

日本	原始	古代	中世	近世
	先土器 - 縄文 - 弥生	古墳 - 奈良 - 平安	鎌倉 - 室町 - 徳川	江戸
琉球	原始	グシク時代	古代社会	
	(石器文化)	貝塚時代	(琉球王国時代)	

図1 グシク時代の位置

2. 石積工のタイプと特徴

調査対象は前回の10城に加え、大里、理佐、照屋の各城、及び沖縄本島(離島も含む)北・中・南部の旧部落民家の石壁を調査した。それらより得られた石壁のタイプは図2に述べる通りである。

(1) 石積工の分類について

対象を評価する過程において、なによりまずその類型化、分類法の存在は1つの前提的要請である。石積工についても同様である。石積工には、ふくから用いられている多くの名称があるが、分類基準を統一しての体系的分類はない。近年天然石を用いる石積工は、施工の合理化・経済性の故にコンクリート二次製品による工法に駆逐されつつある。石積みも谷積みか布積みかの2通りが主流となった。これら類似であろう、石積工も重視されずにあるわけであるが、石積工の持つ「自然美」の価値は、土木空間 図2 城(グシク)の発展段階モデル

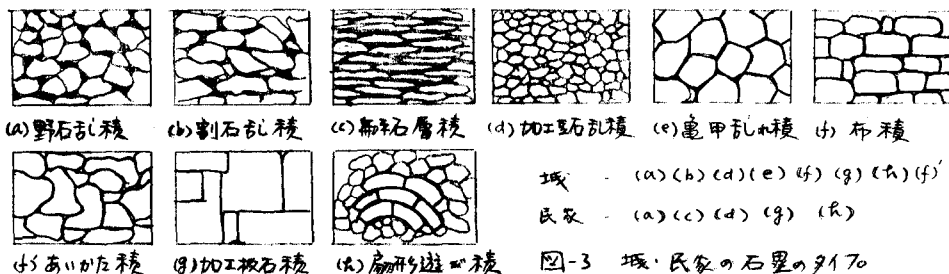
活動の時期から 大時代区分	グシクの 活動の時期から 小時代区分	グシクの発展段階			
		A	B	C	D
I	高土集落時代 (支配者A)	○	○	○	○
II	初期城塞時代 (支配者A)	○	○	○	X
III	中期城塞時代 (支配者B)	○	○	X	X
IV	後期城塞時代 (支配者C)	○	X	X	X
(例)		首里	勝連城	玉城	高城

○グシクとして活動 X 活動停止
A 明治時代以降に廃止されたグシク
B 明治時代以降に廃止されたグシク
C 明治時代以降に廃止されたグシク
D 明治時代以降に廃止されたグシク

構成上、意味ある利用が可能ではないかと思う。そのため利用に際し、計画・設計に利用するべき、体系的分類の必要性が生れるのではないかと懸念される。次の図で、石積工のタイプをほぼ2であるが、一応従来の名称を用いて考察してある。2とは、田地構成・用石加工の視覚を中心に考察してある。

(四) 石積工のタイプ

図-3は、調査した域及び民家の石壁からとれた石積みのタイプである。両者の間に、用石・加工・石積の強弱(田地の統一・規則性)の視覚的差はあり、相互において工法に別種のものが用いられていることはない。したがって図-3は、一応域・民家石壁を含めた、沖繩の伝統的・石壁タイプと考へてよいであろう。



域 - (a) (b) (c) (d) (e) (f) (g) (h) (i)
民家 - (a) (c) (d) (g) (h)

図-3 域・民家の石壁のタイプ

各石積工につき、詳説はエネギが分布の視覚、加工の技術レベル、施工の難易の面から各タイプにつき序列(少→大、低→高差、易→難)をつきとるべきと見做す。

i) 分布 (a) (g) (f)(x)(e) (d) (b) (a) ii) 加工レベル (g) (h) (f)(x)(e) (d) (a)(b)(c)

iii) 施工の難易 (g)(h) (f)(x)(e) (d) (a)(b)(c)

「グンク時代に鉄器が使用されていた」とするのは一般史家の通説であるが、直板石積工にどのような様式が用いられていたかは考古学的成果にも十分それと平接されるものは今日全見されていない。(a)(c)の自然石採取工法は別として、他の石積工の加工の視覚から判断して、(b)→(d)(e)(x)(f)→(g)(h)の順でより高度な工具が用いられたと推定される。

3. 結論

以上十分な資料の提示はしなかったが、次のことから、沖繩の石壁について指摘しよう。

- (i) 沖繩の古い石壁工法は、域及び民家のものを合わせ凡そ9つのタイプが確認できた。
- (ii) 域の石壁は種々の工法の混合が支配的であり、その視覚は7史過程を長く生み出した域ほど顕著である。成立年の殆んど不明な多くの域の成立年代序列は、工法の分布・加工レベルの如何はあきらかに手ごかりを与えると思われる。
- (iii) より高度の石積工 (g, h など) は域の主要な構造部分(張門など)にあるいは視覚的に重要な位置に選別利用している。道県の普及、石工の分布が限定的であったことを示唆する。
- (iv) より高度の石積工の分布頻度は、南部から北部へ遠ざかるほど減少する。(近年、ふくいの石壁は民家においてコンクリート置きかえられつつある。おそらく消滅すると思われる)
- (v) 一般に沖繩の石積の特徴として図-3の(e)(f)が注目されているが、(d)(h)にあるより緻密な網が表出しており、特徴として追加したい。
- (vi) 民家にみける石壁の利用は、防風機能に主として注目があるが、調査の結果からは防風機能は樹木に求められている場合が顕著である。樹木との混合利用により石壁にも同機能を求められているものや、どちらかというよりバリエーションの意味が強いのではないかと。

文献 1) 角田「石の辞典」511 2) 沖繩県史 511 550 p.733 3) 同書 2) p.737 4) 山根「沖繩史要略」546 p.201 5) 石井「沖繩の歴史と文化」546 p.4 6) 土木学会誌 116 No.6 7) 沖繩県史 116 No.6 8) 琉球HB 529. 9) 建築大辞典 549 10) 田淵「石垣」550